

保育士養成が始まりました

こども発達学科 教授 寺岡真知子



人文学部こども発達学科ではこれまでの小学校教諭一種免許状、認定心理士、社会教育主事、学芸員などの免許、資格に加え、2014年度から保育士資格が取得可能になりました。私も今年度4月から赴任し、保育内容や実習関係など保育士養成カリキュラムに関わる科目を担当させていただいております。

全く新しい環境の中で、なかなかペースを掴みきれず、その日その日を自転車操業のように過ごす毎日が続いておりましたが、教職員の方々や何より学生達に助けられながら、ようやく1年を迎えられそうです。

保育士資格取得希望学生達の多くは、小学校教諭一種免許状の取得も希望しており、両方に関わる単位の取得はもちろんのこと、小学校でのボランティア活動への参加や保育園行事の見学など、一年次に様々な活動を経験しました。私に関わった彼らの活動の一端をご紹介します。



今年度私の担当した授業では来年度実施される保育実習Ⅰを念頭に、子どもの成長に大きな役割を果たす保育教材を活用・製作し、その具体的展開を意識した技術を習得することを目的としました。その中で「パネルシアターの製作・発表」も行いました。パネルシアターはフランネル布などを張ったパネルボードに、不織布で作った絵人形を張ったり動かしたりして、歌遊びやお話を展開する表現方法です。初めて取り組む保育教材の製作・発表でしたが、オープンキャンパスで受験生やその保護者の方々の前で披露するという目標が加わり、全員一致団結し、真剣な中に楽しく愛情のこもった、語りかけや歌・動作などを展開し、子どもの心をとらえて離さないパネルシアターの世界を体現してくれました。今回の経験を生かし、幼児達の前

でもきっと楽しい世界を繰り広げてくれるだろうと期待しています。

保育園行事の見学では今年度、6月に運動会、12月には発表会を見学させていただきました。運動会では晴天ではありましたが強風の中、一生懸命、徒競走、リレー競争、借り物競争、おゆうぎ、などに取り組む幼児や卒園生の姿、プログラムをスムーズに進行させる補助の役目を担う保護者、また細心の注意を払って幼児指導にあたる保育士の行動などを観察しました。思いがけず出番の合間の園児と直接会話することもでき、幼児と触れ合う貴重な体験となりました。12月の保育園の発表会見学は、1部が0～2歳児、2部が3～5歳児が発表するという2部構成でした。学生達はそれぞれの発表を見て発達段階を改めて認識し、授業の中で学んだ内容と結びつけて理解できていたようでした。

今年度の2度の見学は、それぞれの行事に個々の子どもの育ちにつながる価値があり、保育士の子どもを支えるきめ細かな配慮に直に触れられる良い機会となりました。学生達は6月の運動会の頃に比べ、多方向から細部に亘って行事全体を捉える事ができるようになっており、その成長が頼もしく感じられました。

またさらに、「保育に結びつく様々な文化をより深く理解するため、直接体験してみよう」と民俗舞踊にも挑戦しました。今回は沖縄県の



宮古島に伝わる「根間の主」と八重山郡黒島の「黒島口説」の2作品に取り組みました。札幌琉球舞踊会の方々に振付を教えていただき、「カマ」「クワ」「ヘラ」などの農具を使用した農作業の動作を自分たちで舞踊的に創作した振付も一部に取り入れていただき、11

月に札幌市のエルプラザ大ホールで開催された「沖縄フェスティバル」で発表しました。初めて触れた沖縄の文化は言葉も全く分からず、また、日常とは異なる中腰姿勢での動作や、農作業の小道具の扱い方など、戸惑うことばかりのようでした。しかし、持参して下さった手作りの沖縄のお菓子などをご一緒にいただきながら、沖縄出身の方々から直接風土や習慣などのお話を伺うことができ、日本文化の多様性を肌で感じ取ることができた貴重な体験だったようです。また、この催しには、学童保育所も参加されており、幼児から

小学生までの子ども達の統制のとれたダイナミックな「エイサー」の演技にも刺激を受け、来年はこの「エイサー」にも挑戦したいと意気込んでおりました。この経験が今後、学生達自身や彼らの教育にどのような影響を及ぼしていくのか、大いに楽しみにしています。

子どもの育ちや保護者をめぐる環境が大きく変化する中で、保育所における質の高い養護と教育の機能が強く求められている現在、社会のニーズに応える幅の広い考えを持つ保育士の養成に少しでもお役に立てるよう、これから努力して参りたいと思っています。

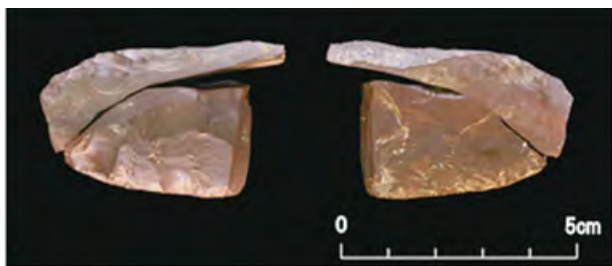
小さな石のカケラから人類の歴史を描く



人間科学科 特別任用講師 **大塚 宜明**

昨年 4 月より、人間科学科において文化領域の科目を担当しています。生まれも育ちも本州の私にとって、北海道の雪の多さと寒さは身にこたえます。そんな冬の寒さに凍える私を温めてくれるのが、石のカケラ（石器）です。

物言わぬ石のカケラから人類の歴史を描く。それが私の専門です。具体的には、アフリカで誕生した人類が、旧石器時代（氷河時代）の日本列島に、どのように移住し住み着いたかを研究しています。世界規模の非常にスケールの大きな内容ではありますが、実は 10cm にも満たない小さな石のカケラが研究の対象です。



ロシア方面からの人類の移住を示す石器（置戸町勝山2遺跡出土）

私の考古学との出会いは、大学入学直後に見た、小さな石のカケラがはじまりでした。標本箱にぎっしり詰まった石のカケラは見るからに鋭利だったので、私は昔の人が作った道具なんだと感動していました。その時、「それは道具ではなく、道具を作ったときにできた石のカケラ、つまりゴミだよ」という話を先輩から聞き、私は驚愕しました。なぜなら、自分にはその石のカケラが当時の人の道具だったのか、あるいは道具を作った時のゴミかも分からなかったからです。同時に、それを判断することのできるのが考古学なんだ

など実感したのです。それ以来、私は考古学の楽しさに魅了され続けています。



置戸町での発掘調査風景

ところで、考古学といえば、まずイメージされる発掘ですが、テレビで放映される映像とは対照的に、実は過去の人類の活動を示す道具や建物の跡はそれほど多くは見つかりません。なかなか見つからないので、そのような発見があるとテレビや新聞などで取りあげられるわけです。とりわけ、私は、考古学仲間から、「はずし屋」などとからかわれています。「はずし屋」とは、発掘中に遺物を掘り出すことができない人への揶揄で、その反対に遺物を出す人を「あたり屋」などといったります。悲しいことに私が掘ると必ずと言ってよいほど遺物が出ません。そして、私が掘っていた場所を、他の人が掘りはじめると、なぜか遺物が出土するのです。この時の悔しさといったら、ありません。このような悔しさやもどかしさが、掘り出された遺物をじっくり研究する原動力になっているのかもしれない。

いま札幌学院大学では、私が経験したのと同じよう

な考古学との出会いが、世代を越えて広がっています。私に比べ、一世代以上も若い学生達が、北海道の置戸町で人類史を明らかにするために、一緒に汗を流しながら奮闘しているのです。置戸町での発掘調査でも「はずし屋」と「あたり屋」がおり、「あたり屋」の笑顔に対して、「はずし屋」はやはり悔しそうな顔をしています。そんな光景を見ると、発掘で体を動かし自分で遺物を掘り当てた時の感動が、年齢も経験も関係なく、伝わってきます。また、そこに言葉ではうまく表現できない考古学のもつ魅力をあらためて感じるのです。

今年の調査では「はずし屋」の私も無事に遺物を掘り出すことができました。晴れて「はずし屋」を卒業

となるかは今後の動向次第ではありますが、これからの調査に注目していただき、その成果を温かく見守っていただけましたら幸いです。



学生が熱心に石器を分析中

新任教員自己紹介



教授 北田 雅子
(こども発達学科)

2014年4月より、こども発達学科で子どもの保育関連、健康・スポーツ関連および健康教育の授業を担当しています。また、2015年度より3年生の専門ゼミナールを担当する予定です。授業や少人数制のゼミナールでは、新しい知識を提供しつつ、学生自らがこれまで蓄積してきた知識や経験を引き出しながら、情報を統合し、理解を深めていくことを重視しています。教育・福祉現場で活躍していく学生が多いことから、今後も「健康」をキーワードに楽しく実践で活用できる授業を展開していきたいと思っています。



特別任用
教授 伊藤 克実
(こども発達学科)

こども発達学科に保育士養成課程ができることになり、4月からその担当教員として着任しました。これまでの乳幼児保育の経験を生かして、志ある学生さんにその豊かな世界を伝えていきたいと思っています。子どもがこの世に誕生し、わずか一年足らずで歩き、話すまでになります。語彙数は年齢を増すごとに著しく増加し、子どもの精神世界は広がり続けます。一人で生きていけない子どもたちは自分の周りにいる大人や仲間たちに頼りながら関わりを持ち、自分を見つめる目を持ち始めます。子どもたちのそのような成長の姿に触れるにつれ、「生きること」「人であること」「育つこと」の意味を考えさせてくれます。そのような機会を持ち続けるなかで、保育者自身も子どもたちと同じく変貌を遂げていきます。保育の世界はとても豊かです。

小学校教員の養成課程と保育士養成課程の両方があることは、幼・保・小連携が期待されている今の時代に適う道筋でもあり、意欲ある学生さんと一緒に学びあいたいと考えています。



特別任用
教授 渡邊 憲介
(こども発達学科)

2014年4月より、こども発達学科で保育士資格取得も可能となり、社会的養護・家庭支援論などの保育科目を担当しています。

児童養護施設の現場で38年勤務しながら同法人の児童家庭支援センターの相談員として電話相談業務も行っていました。

保育士資格取得希望の学生とできるだけ、多くのコミュニケーションを意識した講義を心掛けています。学生にできるだけ課題を与え発表させて不足部分を付け加え、更に現場での事例を通し、『保育士として、どのような対応をすることが子ども達にとっての最善の利益になるのか』ということとを学生と一緒に考えていく講義をしています。来年度から、『保育所実習』と『施設実習』が始まりますが、保育(養育)の現場で理論と技術を身に着けた即戦力として期待される保育士養成に取り組んでいきたいと考えています。



人間科学科では広い学問領域から各自の関心領域を深めていけるように、4つの特徴と、5つの領域を設定してカリキュラムを組んでいます。学科の4つの特徴は「学際性（広く）と専門性（深く）」「充実したゼミナール教育」「フィールドワーク重視」「資格課程の充実」です。ここでは、4つの特徴ごとに最近の活動の一部をご紹介します。

学際性（広く）と専門性（深く）

人間科学に関する広い学問領域を有する人間科学科では、以下のような科目を個人の関心に沿って履修することができます。5領域（社会、福祉、心理・教育、文化、思想）から専門科目をピックアップして内容をご紹介します。

「家族社会学」（社会領域、配当学年2年）

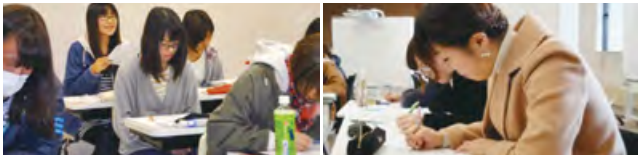
誰にとっても身近でなじみ深い家族については多くのことを経験的に知っていますが、だからこそ家族を客観的に論じることを難しくしています。この科目では、家族社会学の歴史と現状、基本的な考え方や問題関心を検討し、社会の変化にともなう家族の変化、なかでも「近代家族」の成立と現状について考察します。そして、現代の家族がかかえる問題を明らかにし、わたしたちにとっての家族がもつ意味を考えていきます。

「障害学」（福祉領域、配当学年1年生）

障害とは何か？障害と社会の関係は？当事者の視点からの問題意識は何か？などを取り上げ、個人的な問題であるとみなされがちな障害への理解を、「社会により無力化された人々」という視点から社会生活上の問題をとらえていきます。「あたりまえ」と考えていたことを問い直し、わたしたちが生きる現代社会を捉え直していくことにもなります。

「発達心理学 A/B」（心理領域、配当学年1年生）

人間という存在を発達の観点からとらえるとはどういうことかについて、乳幼児期（A）、児童期・思春期（B）について理解します。また、発達に対する社会文化的・社会歴史的アプローチの視点から、保育・教育・社会的実践のなかでの発達をどうとらえるか、保育・教育などさまざまな社会的実践のなかで検討していきます。



「地域文化史」（文化領域、配当学年2年）

「北海道らしさ」の正体は何でしょうか？人間の営みである多様な文化を、地域という視点で考えていきます。北海道を舞台にした人間の生活や思想の歴史を検討することで、個人が身に付けた生活経験や文化を客観的に考え、他者の文化、異文化への理解へとつなげます。

「人間科学と倫理」（思想領域、配当学年1年）

人間科学科の学生として諸領域を科学的に学ぶことは、同時にそこに内在する人間学的および「倫理的」な諸問題についても検討することが必要となります。この科目では、人間生命、技術、科学的認識のあいだの相互連関について学び、人間生命についての基本的

な理解を深め、人間科学の歴史的 position について考察します。

充実したゼミナール教育

1年生は基礎ゼミナール A/B、2年生は基礎ゼミナール C、3年生は専門ゼミナール A/B、4年生は卒業論文のゼミナールがあります。講義とは違う少人数のクラス編成となり、テーマに沿って発表・討議を繰り返しながら、多面的に検討できる力やプレゼンテーションの力を身につけていきます。ゼミナールによっては合宿があり、学外にも出ていきます。



フィールドワーク重視

人間科学科では、さまざまなフィールドワーク（実習）があります。約1カ月にわたる社会福祉実習のほか、心理学実験、社会調査（フィールドワーク）、考古学の発掘調査などです。ここでは、社会教育課題研究Ⅱ（学外実習）を紹介します。これは「社会教育主事任用資格」のために必要な科目のひとつとなっていて、今年は栗山町の社会教育と地域づくり（地域振興）について学ぶ目的で、10名の学生が9月中旬に5日間にわたって宿泊しながら調査を行いました。社会教育主事というのは、社会教育や生涯教育に関する専門的・技術的な助言指導を行うための任用資格で都道府県や市町村の教育委員会に必ず置くこととなっています。卒業までに所定の単位を取得すると卒業時に任用資格認定書交付となりますので、卒業後1年以上公務員として社会教育主事補を経験したうえで社会教育主事となります。学科では毎年数名が任用資格認定書を受けています。



資格課程の充実

人間科学科には中学「社会」・高校「地歴」「公民」「福祉」・特別支援学校教諭の教員免許、社会福祉士・精神保健福祉士の国家試験受験資格、学芸員資格、考古調査士（2級）などの資格が取得できます。社会福祉士課程では今年の8月中旬から1カ月、29名の学生が実習を行いました。児童養護施設、特別養護老人ホームなど高齢者の福祉施設、障害者を支援する事業所、病院や老人保健施設などさまざまです。12月には実習経験の総まとめとして、実行委員を立ち上げて自分たちで実習報告会を準備・運営し、実習指導者や次年度実習生、卒業生にも参加を得て大いに学びを深めました。



近況報告 英語英米文学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/eigoeibe/>



英語英米文学科の学びを一言で言うと、「英語を通して知る人と文化」となります。英語のみならず言葉は、人が使います。そして、人が集えば文化あり。文化が集まれば異文化あり。ここに異文化同士のコミュニケーションを学ぶ意義が生まれます。そこで以下、学内の様々な異文化交流で学び成長する、本学科の学生の声を紹介しします。

①英語キャンプ (All English Camp)

海外に出なくても英語漬けで異文化交流ができる All English Camp。

「残念ながら雨だったので外でのアクティビティがあまり無かったのですが、1年生から3年生・ネイティブの先生とも色んなゲームを通して交流することが出来ました。会話はもちろん英語です。英語のみの環境は普段はあまりなかったのも新鮮で楽しかったです」 (3年・金森花恵)

「ネイティブの先生方はすごく面白くて、英語を使う楽しさを教えてくださいました。また、一緒にキャンプに行く学生とはキャンプが終わるとものすごく仲良くなりました。そのあとの学校生活も楽しく過ごしています」 (3年・新村聡一郎)

「このキャンプは英語力を鍛えるというよりは、あくまで英語を使って交流、楽しむ場だと思います。みんなでゲームをして交流を深めたり、夜の空いた時間にネイティブの先生方としっかりと話をしたりと、交流の場としてとても楽しかったです。なので気張らず楽しむ目的で参加すると良いと思います」

(3年・小野敬真)

②国際学生会議 (International Student Conference)

国際学生会議とは、英語英米文学科の2年生の学生たちが北海道や日本のことについて海外からの留学生にパワーポイントなどを使い英語で紹介する行事です。今年は学院のチア部や、ラーメンについての紹介をしている学生がいました。私は今回「盆踊り」について紹介しました。踊りについては動画を見せながら説明をしたり、和太鼓を実際に叩いたりしました。他にもグラフや写真を用いて、盆踊りの魅力について紹介しました。

この行事の中で、私はプレゼンをするうえでどんなプレゼンの仕方が、自分の主張をより分かりやすく正確に相手に伝えられるのかを学びました。声の大きさ



や抑揚のつけ方など、講義で学んだプレゼンの仕方はどれも日本語のプレゼンでも使えるものばかりでした。今回のプレゼンでは緊張してしまって上手なプレゼンができませんでしたが、この行事の中で確実に自分の力になるものを得られたので、次回以降のプレゼンに繋げていきたいと思っています。

(2年・木村恵理)

③就職—異文化交流から得た就活へのヒント—

私の大学生活は心から充実した大学生活であったと胸を張って言えます。というのも、この大学から多くの素晴らしい経験をさせて頂いたからです。特に「異文化交流」は就職活動をする際に大変役に立ちました。

まず、面接で話す内容が豊富である事。ゼミの活動でタイやアメリカの留学生との交流があり、異文化交流を通して成長した事を、面接官に実体験を交えて説明することができました。

次に、行動力を評価して頂いた事。内定を頂いた企業の人事担当や役員の方々から、会社訪問など他の出願者とは違う行動をした点に対して「行動力がある」と褒めて頂きました。これも、半期アメリカ留学時に「行動する大切さ」を知った事が生かされたのだと感じました。

結果として、6月には希望の就職先に内定を頂くことができました。就職は人生の分岐点ではありますが、何歳になっても挑戦する心を忘れないで向上心を持ち続けたいと思います。

(4年・永井ひかる)



「異文化交流」と言えば海外留学がまず思い浮かぶかもしれませんが、英語英米文学科では、学内でも異文化交流の機会が多く用意されています。そこで今回はあえて海外留学には触れず、本学科に入学すればどの学生でも参加できる異文化交流行事に焦点を絞って紹介しました。本学科の学生は、様々な異文化交流の機会を活用し、成長へと結びつけ、社会に巣立っていきます。

なお、学科のブログ「英語英米文学科 NOW」では、ここに載せきれない学科・学生の様子をお知らせしています。ぜひご覧ください。

(<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/blog/eigoeibe/>)

近況報告 臨床心理学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/rinshoshinri/>



人のこころの不思議に関心を持ち、人に寄り添いたいと思う学生が多く学んでいる臨床心理学科の2014年度の様子を紹介いたします。

大学生活のスタート、そして適応

4月、臨床心理学科には77人の学生が新たに加わりました。入学後すぐの合宿オリエンテーションでは、上級生による楽しい企画もあり、打ち解けた雰囲気の中で新生活の緊張をほぐしました。入学からの半年間は基礎ゼミナールという授業が用意されており、4つのクラスに分かれて4人の担任の下、それぞれ毎週顔を合わせます。基礎ゼミは、大学という大海に飛び込んだ新入生にとっては、適度な人数で集まれる小島のような身を置きやすい場所です。そこでは、気の置けない仲間もでき、大学生活の足掛かりとすることができます。また、ハラスメントに関する学びや対処法など大学生活に必要な情報を得る場ともなっています。6月14日には恒例の人文学部スポーツ大会が行われ、その準備もクラス単位で行いました。クラス対抗の種目もあり、クラスの連帯感は強まりました。



座学だけではない学びの機会

臨床心理学科は、「臨床」という言葉を学科名に付けていることから分かるように、座学だけではなく体験型の学びを大切にしています。3～4年生対象

の応用実習Cでは、今年も施設見学学習として、児童相談所、精神病院、重症心身障碍児施設、少年鑑別所、養護学校、精神保健福祉センターなどに行きました。また、恒例になっている里親会会長の話しでは、ここ2年間は里子さん自身や里親（里母）さんの体験談も聞かせていただいています。このような学びから専門性への芽生えも感じられ、卒業後の進路に影響を与えることも少なくありません。今年も、心打たれ、心に残る体験となりました。

ゼミ：再び親密な関係性

4年生には卒業論文の執筆に取り組んでいる学生たちがおり、ゼミ単位で指導を受けています。ゼミによっては3年生や大学院生なども加わり、一人一人が小さな研究者となつて、学ぶことの奥深さを体験しています。興味関心やテーマが近い仲間が多く、基礎ゼミ以上の親密な人間関係を体験し、社会へ巣立つ自信を積み重ねています。



進路について

一般企業に就職する学生もたくさんいますが、臨床心理学科に入学してくる学生の多くは、入学時には「大学院に行って臨床心理士の資格を取得して、スクールカウンセラーとして働きたい」「病院・福祉施設等で対人援助職を目指したい」といった希望を持っています。他大学を含めて大学院に進学して臨床心理士を目指す者は毎年10名前後います。大学院修了後は、病院、矯正関係、教育臨床の場で仕事をしながら臨床心理士の受験を目指すこととなります。また、精神保健福祉士の養成コースを履修するものが20名ほどおり、福祉関連施設に就職しています。今年も、8月に精神保健福祉士を目指す学生の合宿があり、食事作りや農作業体験などを体験し、精神障碍を持つ方々も参加してのグループワークも行いました。



近況報告 こども発達学科

こ発の森 : <http://jinbunweb.sgu.ac.jp/child/>



子どもの成長・発達について専門的に学びたい! 教育現場で子どもたちに教え、彼らの学びを支援したい! と考える学生約200名が、日々、自分の知識と技術を磨き、成長しています。在学生の皆さんの2014年春からの様子を紹介します。

1年生: 大学生活スタート! 保育士養成もはじまる。

2014年春、40名の新入生が入学。入学オリの際に行ったレク企画から、大学生活にとっても前向きな皆さん。



講義や演習科目では、教卓のすぐ前の席で講義を熱心に聴く1年生が何人もいて、授業の雰囲気はよい意味でピリッとしています。

今年度開設した保育士養成カリキュラムでも、パネルシアターの制作・発表などの実践課題に熱心に取り組んでいます。



人文四学科の1年生クラスが競い合った体育大会では、上位を独占する活躍ぶり。皆の団結力がひかりました。新任の保育士養成の先生たちにもこやかに応援。



1年次は、外国語、論述・作文、コンピュータ基礎などで、基礎力を養います。そして、「基礎ゼミナール」では、発達・教育の諸問題についてグループ研究。発表会では、PCを活用して力の入ったプレゼン、質疑応答の際は一人で三点質問する学生もいて、活発な討論に。



大学のレポート課題でも、1年生の精一杯取り組む姿勢が伝わり、「話す」と共に「書く」力も養っている様子。

2年生: 子どもと直にかかわる。視野を広げる。

2年次には、具体的な教育や発達支援の方法を学びはじめます。国語や体育など、教科ごとの授業の作り方を具体的な教材を手にしながら学んでいます。



子ども対象の行事をつくる実習

では、「見えない力をためそう! ~風でうごくおもちゃとまさつの秘密~」というテーマで、工作コーナー、紙芝居、楽しいゲームと、工夫盛りだくさんの体験行事を、良いチームワークを発揮して準備しました。リハーサルを何度も繰り返し替えた努力が実を結び、参加した子どもたちは皆、とても楽しそうな表情でした。中には、やり遂げた! と達成の喜びで涙する学生も。今年の2年生はよくまとまっています。



3年生: 実践的な課題に取り組み、力をつける。

3年次には、より実践的な教育や生徒指導の方法を学びます。国語概説の講義で、説明文の構成や構造を理解し板書に生かす学習をしました。また、小学生の子ども達の視点で「漢字カード」を工夫して作るなど、教師として



授業を行うために必要となる教材研究に真剣に取り組んでいます。



専門的なテーマを自らたてて研究する力を養う「専門ゼミナール」では、積極的に力をつけようと、4年生と合同で発表や討論の機会を持つゼミも。

4年生: 教職課程の仕上げと卒業研究、そして卒業へ。

模擬授業などを行う実践的な事前指導を受け、実習先の小学校で三週間の「教育実習」にのぞみました。子どもとしっかりと向き合って授業をやり遂げた皆さん。子どもたちとの思い出と現場の先生方からアドバイスをたくさん得て、一回りたくましくなって大学にもどってきました。



学内でも、PTA役員などを経験された方を招いた講義で、児童の保護者の視点も学びました。

教育実習を終えた4年生が、来年臨む3年生のために研究授業などの体験を伝えてくれました。後輩をサポートする気持ちや行動が、受け継がれています。

ホームページ“こ発の森”では、本学科の様子を詳しく紹介しています。ぜひご覧ください。



TOPICS

2014年度人文学部合宿オリエンテーション



入学式から3日後の4月4日(金)から5日(土)の2日間定山溪にて、1年生合宿オリエンテーションが行われました。このオリエンテーションは、毎年、いち早く大学生活における不安軽減やゼミの仲間と打ち解け学生間の協力を促すことを目的として行われています。合宿オリエンテーションにはゼミや学部の先生方だけではなく、各ゼミの先生方のサポートやオリエンテーション内の企画をするために、2年生以上の学生や学生自治会の執行委員も参加しています。

1日目は、人文学部に在る4つの学科ごとに様々な企画が行われ新入生を歓迎しました。今後学生生活を送る上でよく足を運ぶことになる教務課や学習支援室や学生課の職員の方からオリエンテーションが行われました。それだけではなく、レクリエーション形式で札幌学院大学について知るための企画なども行われました。その後、バスで定山溪に移動し夕食をとりました。1日目最後に行われた学部企画では、クイズや体を動かすゲームを行い自分の所属するゼミだけでなく他のゼミの学生とも交流し、笑顔を見せてくれた学生

人文学部学生自治会 執行委員長
人間科学科3年 佐々木 勇太



が大勢いました。

2日目は学校に戻り、先輩学生や先生方に資格や講義について相談する時間が設けられました。取得したい資格や興味のある分野について熱心に相談している新入生の姿が見受けられました。

最後になりますが、この合宿オリエンテーションが新入生にとって、今後の学生生活を充実させるための、良い思い出となれば幸いです。



2014年度人文学部体育大会



2014年に第36回人文学部1年生体育大会が行われました。今回の種目はバレーボール・ドッジボール・玉入れの三種目で行われました。運営を行う体育委員達はオリエンテーション終了時に集められた一年生。集まった当初、自分は上手くいくのか不安に思っていたが、委員の皆様のお力により種目やルールの選定は順調に決まり準備

期間の三ヶ月を順風満帆でわたりきることができました。僕は副委員長を勤めさせていただきましたが、当初の自分はクラスに女性が多かったこともあり(そして中学校・高校の経験から辛い記憶しかなかったので)

人文学部体育大会副実行委員長
臨床心理学科1年 坂川 龍之介



誰でも楽に楽しめる体育大会の運営を目的として立候補しました。しかしスポーツマンの体育委員長には福司さんが選ばれ、僕は補佐である副委員長の座に甘んじることとなりました。無念。ですが、体育大会は辛いものであるはずだとの僕の邪推は惜しくも外れることとなります。委員長に選ばれた福司さんのリーダーシップと行動力で体育大会の準備は順調に進み、種目決めやルールの決定等も問題なく進み、当日を迎えることとなった体育大会。スタートの玉入れから始まりバレー、ドッジボールに掛けて皆さん終始楽しそうな笑顔を浮かべていました。「女性はドッジボールやバレーにはあまり出たがらないかな?」といった僕の懸念も空しく、女性陣が自分よりもバレーで活躍している姿等も見れてとても感動しました。クラスの団結力も高まった体育大会はこれからも続いてほしいです。



◆編集後記◆

前号に引き続き、今年も新任教員の紹介を前面にだした誌面構成にしました。今年度、巻頭エッセイの寺岡真知子先生をはじめ、保育士養成カリキュラムがはじまるのに伴ってこども発達学科に4名の先生をお迎えしました。人文学部の四学科それぞれが年々変化しています。読者の皆様へ、人文学部の“今”の雰囲気を感じていただけたら嬉しいかぎりです。原稿をお寄せいただいた全ての方々に感謝致します。(鈴木)